

発達遅滞をとともなう 自閉的傾向児について

斉 藤 京 子

第一章 障害幼児通園施設上田いずみ園の実践

一、上田いずみ園の概要

上田いずみ園は、昭和51年4月社会福祉法人カルディア会設置と同時に開園した。所在地は、上田市の中心地より少しはずれた東部に位置し、住宅街の中にある小さな施設である。

定員は30人、対象児は、0才～6才迄の乳幼児を対象とし、障害を問わず受け入れてきた。措置児は、平均して15名～20名と少ないが、年齢が低く、全面的介助を要する段階の子ども達が多いため、保母数6名でギリギリまいすることしばしばである。しかし、救われることは、同一敷地内に小規模保育所（0才～6才迄、定員36名）を持ち、常に障害を持っている子もそうでない子も、共に生活しているということである。

現在18名の子どもに対し、施設長1、主任指導員1、保母5、厨房2（栄養士1、調理士1）、事務員1の10名の職員で携わっているが、直接子どもの処遇に当たっているのは、6名の保母である。

二、現在の入所児状況 総数 18名（男子14名 女子4名）

5才児 男子3名 女子2名

- ダウン症と脳性マヒの合併症 1
- 遅滞児（自閉的傾向を含む） 2

• てんかんと脳性マヒの合併症	1
• てんかん	1
4才児 男子4名 女子0名	
• 水頭症	1
• ダウン症	1
• てんかん	1
• 遅滞児	1
3才児 男子4名 女子2名	
• てんかんと脳性マヒの合併症	1
• ダウン症	2
• 遅滞児	2
• 脊椎損傷	1
2才児 男子3名 女子0名	
• 脳性マヒ	1
• ダウン症	1
• 遅滞児	1

三、保育時間

午前8時30分から、午後2時迄で、日々保育である。しかし、その子どもの発達段階によって、第1段階 8：30 ～ 10：30
第2段階 8：30 ～ 11：30
第3段階 8：30 ～ 12：30 又は1時迄と徐々に時間を延長していき、最終的に2時になる。

ケース担当は、保母1名に対して3名～4名であるから、18名の子どもに6名の保母が全員一丸となって、育くんでいくということをたてまえとしてオープンシステムをとっている。そして、個別処遇は、その中で時と物を選択しながら推進していく。

四、「いずみ園保育指針」

1. 幼児の基本的発達を助ける。

(早期発見・早期処遇)

2. 障害を治す指導はできない。

(二次的障害の発見及び治療に努める)

3. 保護者、子ども、保育者の三者が共に学び合う姿勢を持ち作っていく。

4. 最終的には、一般保育所、幼稚園、学校へ返していく。

私たちが子どもを受け入れるに当り、なによりもまず「子どもである」「ひとりの人間である」という観点に立ち、障害を障害とみないで、それをその子どもの、ひとつの特徴として扱うことを基本に、保育指針ができており、日々の保育を展開している。

五、保育目標の設定

保育目標は、1ヶ年をめぐり、第1期から第3期迄段階別に設定し、子どもの発達状況に応じて、この期間が長くも短くもなる。

「年間保育計画」

＜第1期 (4月～8月)＞

○全面受容とレポート形成

- ・全面受容により、子どもの心を開放し、情緒の安定を図り、個性の発見に努める。

入園当初は、個々の子どもがどんな子か、何をしがっているのかを知ること集中し、保育室は全部開放し、色々な遊具を用意し、その遊具で遊ぶ子、無関心な子、終始泣いてばかりいる子、すぐ外へ行ってしまいう子、私たち保母は、決して「○しなさい」と、おしつけは避け、見守る。

言葉がなく、表情に乏しくても、子どもが身体から発してくる信号をしっかり受け止め、子どもの気持ちに聞きながら、臨機応変に保育内容を変化させ、最も子どもに合った保育展開に努める。と同時に、保護者の良き聞き役に徹しながら、子ど

も・親・保母の人間関係づくりを大切に、母親の情緒安定に努める。

＜第2期（9月～12月）＞

○集団参加と課題づけ

- ・集団での個人プレーを通して、個人の関心ことから自然な課題づけを図る。

例えば、ただ水道の水を出して遊んでいる子に、そっとバケツを渡し、その中に手を入れバシャバシャとやり、子どもの反応を見ながら少しずつ人を意識するような配慮、そして遊具にも少しずつ手を出すよう配慮しながらひとりの子どもの世界を少しずつ広げていくことに努める。

- ・集団個人プレーをやや強化し、集団参加へのアプローチを押しすすめる。

集団の中で、積木で作った汽車にすわり、歌ったり、体を動かしたり、絵本等で汽車がどんなものかを視覚でうたえていく中で、子どもの心に汽車のイメージが伝わったところで本物を見に行ったり、乗ったり、汽車の遊具を出したりしてみる。子どもの中には目を輝かせて参加してくる子、全く見向きもせず関心を示さない子と、反応はさまざまであるが、無理にさせることはしない。私たち保母が楽しく参加している場面を、何度も何度も繰り返し見せていく中で、全員の子どものがどうにか参加できるようになる頃には、他の場面でも集団としてのまとまりを必ず見せてくれるものである。

一方保護者には、母親の研究として、子どもの成長、発達、専門知識、技術などの学習を主体としたプログラムを組んでいく。

- ・保護者対象に現場からの発表
- ・参観、グループカウンセリング
- ・家庭訪問（2回）
- ・個別懇談
- ・父の日参観（2回）
- ・合宿（園内合宿、親子合宿）

＜第3期（1月～3月）＞

○適応性の強化

- ・第2期で身についた課題の適応性を拡大し、定着を図る。

言語へのかかわり、形色の理解、その他自分の意志で選択、表現していくなどの個別的指導を強化していく。これも無理にやらせるのではなく、子どもの関心事に参加し、子どもの気持ちに聞きながら意欲を盛り上げ、課題遂行していく。

保護者とは、2学期にある程度までにつめた、今後の進路について何度か話し合いながら最終的な決定をしていくようにしている。

保母は、いつも謙虚な姿勢と科学的な目で子どもを見つめ、人間として一番大切な、内面の美しさを持つ子ども達ひとりひとりから、日々の中で学びとっていく態度を忘れてはならない。又保母集団としては、常に相手を受け入れられるという姿勢、そして、それぞれの個性がいかに発揮され、表現され、調和したときにきわめてすばらしい集団としての実力が発揮されるものと思う。

この仕事は、人とのかかわりの中で成り立っていくものなので、自己をみがく(トレーニング)ことを怠らないよう自分で努力するようにする。その時、その場で自分は何をしなければならないのかを考えていくことにより、本当のチームワークができ上っていくのではないと思う。

六、措置児の受け入れ

1. 入所準備、児童相談所からの書類の検討、熟読、両親、子どもとの面接を受け入れ体制を整える。
2. 場面提供し、本人をじっくり観察することにより、どんな子なのかを知る。
3. 指導会議(ケース会議)を持つ。

観察報告、目標設定(最低限6人の直接処遇保母が頭に入れておかねばならないことを検討する)

4. 日々の子どもの生活を話し合い、ごくわずかな信号でも受け止め、そして指導の仮説をたてながら、次のステップへと進めていく。ケース会議は、ひとりの子どもを中心に、6人の直接処遇保母が思い思いの方向、角度から意見を出し合い、その子どもをより深く追求した上で、園長、主任指導員の助言のもとに、担当保母がまとめていく形態をとっている。この会議は月に一度、一週間の時間をもって行

なっているが、今だに1週間で終わったことはない。

七、1日の保育の流れ

8 : 30 ~ 8 : 40 登園, 出席カードシール貼り, 身辺処理

8 : 45 ~ 9 : 30 機能訓練 (竹ふみ, タワシ, 柔軟基礎体操等)

自由遊び

9 : 30 ~ 10 : 20 朝の集まり (朝の歌, 出席点呼, おやつ)

集団指導 — 機能訓練主体

(ピアノ体操 — いずみ園体操)

10 : 20 ~ 11 : 20 自由遊び (保育園児と共に)

11 : 30 ~ 12 : 30 食事指導 (厨房の職員も同席し, 子どもの指導観察に
当る)

12 : 30 ~ 13 : 30 自由遊び (個別指導の時間も含む)

13 : 30 ~ 13 : 50 帰りの集まり, おやつ

14 : 00 降園

いずみ園では, 母子通園を原則とし, バス等での送り迎えはさける。本来ならば, 母子で歩いて通園することをお願いしたいところなのだが, 遠距離からの通園者が半分以上を占めているので, 自家用車, 私バスでの通園が主となっている。

上 田 市 内 12 名

東 部 町 2 名

坂 城 町 2 名

丸 子 町 2 名

母親にしてみれば, この子ども達を健常児と同じように外へ連れ出すということは勇気のいることであるが, 母子で歩いて通園することにより, 母親の中の1つの難関を乗りきれるようになればと思っている。

でも, それをできない母親にかわって私たちは, 子どもを外に連れ出す機会を多く持ち, 買い物, 外食, 散歩, 電車に乗るなどどこへでも連れていくという自然の行動が, 知らぬ間に足腰を鍛え, 表情を豊かにしていくものと確信している。そして,

「すべてのものを手造りで」をモットーにできるだけ努力している。(例……出席カード、通園カバン、はめ絵、木の車、卒園の記念品等)

八、統合保育について

最後に本当の意味で、子どもにとっての統合とは何かを真剣に考えていかなければならないのではないかと思う。単に健常児の中に入れればよいという時代は終わったように思う。何故ならば、この子ども達にとって一斉保育というのは、無理な点が多いからである。むしろ自由奔放に羽根を広げさせ、けれどもその中には厳しい約束ごとが含まれ、そしてなおかつひとりひとりを大切にした上で、創造性や意志を大切にした保育が必要であり、又そうでなければならないと思う。

最近どこの幼稚園、保育園でも統合ということばを建て前に、きめ細かい指導を必要としている子ども達を受け入れているが、現在の保育体制ではどうも健常児にも、受け入れてもらった子どもにも無理が生ずるのではないかということを、日々生活を共にしている子ども達からおそわった。

一般保育所、幼稚園できめ細かな保育がなされているならば、私たちのような施設は必要なくなってくるのだろうが、早期発見、早期治療をうたっている現在においては、子ども同士のつながり、又生活体験をさせるためには、現在の通園施設が大きな役割を果たしていると思われる。そして又、子どものため、現在の保育体制というものも、考えなおさなければならない時期にきているのではないかと思われる。

第二章 自閉的傾向児の事例

Y・Y君 昭和50年9月13日生

一、生育歴

胎生期：母親妊娠2ヶ月より出産まで、流産止めの薬を服用

妊娠5ヶ月より貧血の薬を服用

高血圧のため薬服用

出産時：熟産で正常分娩

初体重…… 2,750 g

乳児期：人工栄養…… 100%

離乳…… 8ヶ月

発育……普通

幼児期：かんしゃく日に1度あり

夜尿あり（2.4才でおむつとれる）

1才5ヶ月

呼んでもふり向かない。1人でよく遊ぶ。母や他人に無関心。近所の小児科で信大を紹介される。聴覚に異状なしと診断される。自閉的傾向があるので児童相談所を指導された。おちているものはなんでも口に入れた。

1才9ヶ月

母親、児相の母親教室へ参加

2才6ヶ月

異物を口にする事はなくなる。呼ぶと少しはふり向く。他人にも関心を示す。父母の動作をまねして新聞を見たり口紅をつけたりする。母親の言うことは、自分の関心事のみ理解する。

意志表示はクレーンハンドで。

2才10ヶ月……水疱瘡

3才3ヶ月……耳下腺炎

発育状況：首のすわり…3ヶ月

ひとり立ち…11ヶ月

ひとり歩き…1才1ヶ月

発語…2才10ヶ月「ウマウマ」

二、入所時の状況 ※ 昭和53年4月1日

三輪学園入所

昭和54年4月1日 上田いずみ園に措置変更

衣服の着脱：上半身・下半身部分介助

靴は自立

排泄：時間排泄（声かけによる）

食事：手づかみ、偏食あり（スプーン、フォークを使わせて介助）

他児との関係：他児には目もくれずひとり遊び

遊び：ブランコ、スベリ台、三輪車、積み木、ハサミ、なぐり書きなど。

集団生活：職員とのラポート形成を図るため集団はあまり考えない。

言語：歌を歌ってあげると、口もとを見て口を動かす。

名前を呼ぶと振り向く。

物を投げるとき「ポン」物をたたくとき「パーン」

日常生活の簡単な言葉は理解。

母親との関係：おんぶ、だったの経験が少なく、ひとり遊びをしていて、母親は本児といっても楽しくなかった。

母親の後を追わない。

職員との関係：担任にすぐ慣れ一緒にいることを好む。

自分のできない事にぶつかると職員の手をひっぱってやらせる。

4月下旬担任の後を追う。

家族構成：父、母、本児、弟（昭和56年6月生）

三、考 察

本児が、最初体験した集団生活は、私たちと同じ使命をもつ三輪学園である。この1年間の中では徐々に様々な変化（発達）をみせ、今一步のところで父親の仕事の関係で、転勤ということになり本園へ54年4月1日入園してくる。本児にとってはすべての環境が全く違ってしまった中でのスタート（特に母親は、話し相手をなくし家の中にこもってしまう。又妊娠で体も思うままにならず）この1年は（54年4月～55年3月）大きな変化もみられず、かえって退行してしまったような気がする。（本児は、様々な環境の変化と対決していたのであろうが私たち自身それを

くみとれず、全面受容とラポート形成という目標に戸惑わされてしまったことも事実であろう)そこで55年度はもう一度本児と本当に対決しようと思い、本児をかわいいと思うことからやり直す。すると、本児のしぐさひとつひとつ、又発する言葉ひとつひとつが通じ合い混乱が少しずつなくなってくる。もう一方私たち保母集団の人間的環境づくりに細心の注意を払いながら、そして楽しい遊びの雰囲気づくりに努力していく中で、眠っている神経の(二次的障害)呼び起こしのため(逆に鋭過ぎる神経を通常に戻す)毎日、少しずつの時間、気長に感覚刺激を中心に(平衡、皮膚、固有、味覚、嗅覚)走る、おいかけっこ、肩車、ブランコ、大人がねそべった上を歩く、でんぐり返し、振り回す、遊具に乗せひっぱり、トランポリン、皮膚をタワシでこする、一本橋こちょこちょ、シャワーで水をかける、いずみ園体操、竹踏み、手遊びなどしていくうちに、少しずつ快感情が芽生えてき、又もってしてくれと要求を出す。そこには保母との接触、他児との接触があり、人に対する芽生えと共に、ごくわずかずつではあるが、言語面、遊びの場面などにも変化を見せてきたことは事実である。又、保育者は、母親を全面受容しながら、降園時必ず本児の園生活でのおもしろい場面、良い場面を話し、こんな方法で接すると楽になりますよ、と10分~15分の立ち話を二期間(4月~12月)徹底して継続していく。そうするうちに「とにかく先生、子どもを怒ってもだめですね」とか、「家でもこんな事をする様になりました」等と気さくに話し、大声で笑い、どの保母ともバカを言い合って帰っていくようになった。そんな中で本児は、少しずつ言葉を覚え、手、足、洋服を汚して遊ぶようになり、パニックを起こすことがなくなり、食事面でも良い結果が出てくるようになる。この間には下の子を出産(6月)ということもあって、母親を変えるのに大きな影響があった。(下の子の成長と共に、本児へのかかわりのまずさに気づいてくれたこと……) 母親の変化が本児の成長にも大きな影響を及ぼした事も事実である。しかし、子どもにとって環境が一変することによって、元に戻る迄こんなに時間を要するものかと改めて考えさせられた。

56年度を迎えての大きな変化は、登園すると父親にバイバイをし、保母に「おはよう」自己アピールで「有一・有一」迎えにきた母親に笑顔で走り寄っていく。そして徐々にではあるが、友達に目を向けはじめ、共有の場を持ちはじめる。昨年ま

での接し方と言えは、傍にいる子、走って行って自分の前にいた子等に対して、たたいたり、つねったり、かじったりという初歩的な方法であった。ところが、散歩時友達と手をつないだり、本児の好きなリズム遊び（わらべうた）等をしている小学生のグループがあればそこにすっとんで行って仲間に入り、一緒に遊びはじめる。ブランコの2人乗り、多勢の友達との遊びの場（電車ブランコを利用したの電車ごっこ、箱積木で作った電車に乗る）等も多く見られるようになり、家庭に於ても、弟の成長により、ふざけ合い、けんか、うばい合い等の行為が出て来たことが、本児を本来の人間に戻しているのかも知れない。のっぺらぼうだった顔の表情が喜怒哀楽を充分に示すようになり、言葉が出てくる。（まだ平坦な話し方ではあるが）必要な事は、単語の羅列ではあっても、なんとかコミュニケーションを心がけている姿がうかがえる。又食事もおかわりをして、おはしを使い、自分で食べ、給食人数報告も厨房まで行き、してくるなど、基本的な生活習慣はほとんど自立に近い点からみて、集団生活への適応も大分できてきたように思われる。いいかえれば、人から人間にかえるためには、まず心のつながりを欠いてはだめだということも本児を通して教えられた。やっと、父親、母親、弟、保母との関係が育ちつつある段階であり、これから更に深めていく必要がある。これからは今以上に感動を共にするという体験の場（今まで欠けていた人間としての体験）をより多く持つことによって、ひとつひとつ壁をこわしていき、彼らの特徴でもある固執性を除去し、柔軟性を育てていくことが今後の大きな課題とも言える。

（社会福祉法人カルディア会）
上田いずみ園